



出土したト骨類と有孔円板

鍋田川遺跡

鍋田川遺跡は、昭和三十三年に、鍋田川砂防堰堤建設工事のときに発見された遺跡です。阪奈道路上り線が通る大東大橋付近一帯が遺跡の中心と考えられ、以前から土師器、須恵器が採集されてきました。標高

は約二十メートルぐらいで、頭上には国見高地性遺跡があり、眼下に、弥生前期集落の中垣内遺跡を見下ろす場所にあります。

主な出土遺物は、弥生時代後期の土器や、古墳時代の土師器、須恵器の骨や亀甲を焼いて生じるピワレによって吉凶を占うもの、数個も林立していたといわれています。滑石製の有孔円板、ト骨などの出土と考え合わせると、鍋田川遺跡は、特別な祭祀を取り行う場所であったのではないかと考えられます。

ほかに、滑石製の有孔円板や、獣骨、魚骨、スッポンの骨などがあり、人骨の出土もあつたそうです。工事中の発掘調査だったために、残念ながら詳しいことはわかっていませんが、出土遺物から、遺跡が営まれたのは、古墳時代前期が中心と考えられます。

特に注目すべきは、鹿の骨に刻み目を入れたものやト骨に用いられたと考えられる肩骨が発見されたことです。ト骨というのは、獣骨や亀甲を焼いて生じるピワレによって吉凶を占うもの、数個も林立していたといわれています。

滑石製の有孔円板、ト骨などの出土と考え合わせると、鍋田川遺跡は、特別な祭祀を取り行う場所であったのではないかと考えられます。

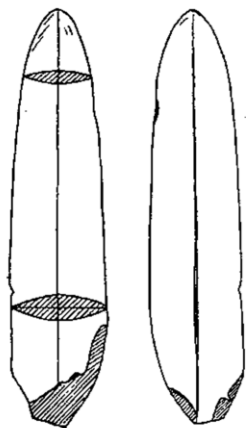
龍間の遺跡

龍間遺跡・龍間ハンサカ遺跡

(その1)

古来から、生駒山地を越えて大和へ行く方法が、暗峠越え、竜間越え、清滝峠越えなどがありました。

市内でも、中垣内から龍間を経て、大和へ通じる道として龍間越え、あるいは中垣内越えとも呼ばれていたルートがある歴史は、今のところ弥生



龍間ハンサカ遺跡から出土した磨製石剣

時代にまでさかのぼることができません。阪奈道路の旧料金所付近にある龍間遺跡では、弥生土器とサヌカイト製の石小刀が出土しており、中の池近くの龍間ハンサカ遺跡でも、見事な加工をした磨製石剣が出土しています。残念なことにも両者とも採集遺物のため、どのような遺跡であつたのかわかりませんが、時期は弥生時代中期ごろと考えられています。

先に紹介した国見高地性遺跡も同様の時期であり、龍間地域では、遺跡が点在していたようですが、これらの遺跡間を結ぶルートが龍間越えの最初の姿であつたのでしょう。

そして、このルートは現在も阪奈道路として、大阪と奈良を結ぶ重要な幹線道路となつていています。